

ガネフォ出場を振り返って

ガネフォ水球

村上（本郷）順三

（成城大学出身）

本年の 2023 年（令和 5 年）11 月は、インドネシアで開催された「ガネフォ」「GANEF0」（新興国競技大会）に、私が出場して丁度 60 周年の節目の年になります。

「ガネフォ出場」の事が、後年になってこれほど皆様に理解され・親しまれ・愛され、そして称賛されるとは、思ってもいませんでした。

ガネフォ水球チームの 12 名は、ガネフォに出場するに当たり、皆の^{みんな}了解を得て私が日本水泳連盟宛に「脱退届」を毛筆にて作成し、菅久キャプテンを經由して頭山立國団長に託し、日本水泳連盟に脱退届を提出しました。

当時、私が勤めていた会社（日本アミノ飼料（株））は、味の素（株）と伊藤忠商事（株）と森永乳業（株）の 3 社によって 1961 年（昭和 36 年）2 月に設立された新しい会社でした。牛・豚・鶏等に食べさせる飼料（エサ）を製造・販売している会社で、私は入社 2 年目の若い社員でした。会社はインドネシアとの関係を重視して、私がガネフォに出場する事に理解を示してくれました。そして直属上司の古川欣一常務取締役（伊藤忠商事（株））の創設者である伊藤忠兵衛様の親戚にあたる方）から 1 か月間の休暇も頂く事が出来て、大変ありがたく今でも会社には感謝しています。

それからもう一つ感謝している事があります。それは、JOC や日本水

泳連盟が反対する中で山本健様には、大変お世話になりました。山本健様（通称：ゴンさん）が、陰から応援して下さったお蔭で、ガネフォに行けたと思っています。（山本健様は、ローマオリンピックに出場した選手で、成城学園高校卒・慶応義塾大学卒、そして成城大学水泳部で私の3年先輩に当る「山本勉様」（通称：アーボー）のお兄様です。）

その山本健様から当時適切なアドバイスや経済的援助（東京・練馬区にあるアパートの一室を借りて、電話も付けて「そこを拠点にいろいろ準備しなさい」と無償で我々に提供して下さいました。）を頂きました。そのお蔭で水球チームをまとめることが出来、日本政府の考えに沿って、インドネシアとの親善の為に、正々堂々と「ガネフォ」に出場する事が出来ました。今でも感謝しています。

そのガネフォ出場から60年が過ぎた今日こんにちになっても、皆様から評価され、称賛され続けており、大変嬉しい限りです。「ガネフォに出場して本当に良かった」と今でも思っています。我々水球選手の一生の『宝』であり、一生の『財産』です。一つ残念なのは、菅久キャプテンを初め浜野、田中、房野の水球チームの4選手がすでに亡くなっており、彼等かれらに現在の状況を伝える事が出来ないのが、とても残念でなりません。

ガネフォ出場当時は、ガネフォに対する理解があまり無かった為、出場する事に賛否両論がありました。ガネフォ出場に反対する人達は、「日本水泳連盟の方針に従って、ガネフォに出場しない方が良いと思うよ」と言ってくれました。当時は、そういう解釈が一般的でした。しかし「そのような考えで何も行動しなければ、他国との国際親善も出来ないし、世界平和にも貢献出来ない」と我々は思いました。

当時、日本政府（池田首相）としては、対インドネシア（スカルノ大統領

領)との間に戦後の賠償問題が残っており、両国の関係を出来るだけ悪化させない様にしたい事、そして、出来る事ならインドネシアとの関係を今よりも発展させ、日本経済を益々向上させたいとの思いがありました。我々はその考えに賛同すると共に協力する事にしました。そして、日本水泳連盟には脱退届を提出し、ガネフォには胸を張って正々堂々と出場しました。

一方、日本水泳連盟は国際水泳連盟の傘下にあることから、国際水泳連盟に加入していないインドネシアが開催する大会には、出場しない事を当初から表明していましたが、ガネフォへの選手派遣は行わない事を早くから決めていました。

一方、他の競技種目のレスリングや柔道の場合は、世界からの締め付けもなく、日本の思う通りに行動することが出来たようです。そして、レスリングや柔道はそれぞれの連盟への脱退届をどうしたかは知りませんが、連盟との間には何の問題も発生せず、正々堂々とガネフォに出場しました。

当時は日本国内のそれぞれのスポーツ連盟によって、ガネフォ出場に対する考えにいろいろと差があったようです。

これも当時の状況を思うと止むを得ない事かと思いますが、いずれにしても日本水泳連盟は、国際水泳連盟の傘下にある事から、国際水連の方針に従い、ガネフォには選手を派遣しませんでした。そして、ガネフォに出場した水球選手から脱退届が提出されているにもかかわらず受理せず、ガネフォ水球選手12名に対し「除名処分」を下しました。

しかし、ガネフォ開催から9年後の1972年(昭和47年)9月に、日本の「田中角栄首相」と中国の「周恩来首相」による「日中国交

正常化」が結ばれた事により、日本水泳連盟はガネフォ水球選手の12名全員を日本水泳連盟に完全復帰させる事にしました。

現在、世間の方々からは、「ガネフォ水球チームは日本政府の考えに賛同すると共に、国際水泳連盟から誤解を招かないように、日本水泳連盟に対し脱退届を提出するという行動をとってまで、ガネフォに出場したようだが、当時の状況下でよく勇気をもって行動しガネフォ GANEF0（新興国競技大会）に出場したね、大変辛かっただろうが、偉かったね。」と称賛のお言葉を頂いております。

また本年6月中旬に令和天皇・皇后両陛下が、即位後初めて友好親善の為にインドネシアを訪問されましたが、そのテレビを観ながら両国が相変わらず良好な関係にある事を大変嬉しく思いました。

最近は多くの皆さんが、60年前のガネフォ出場に理解を示して下さるようになり、50周年からは毎年ガネフォ会を東京で開催してきました。そして、50周年には、ガネフォ水球関係者による「懐^{なつかし}かしのガネフォ」（54頁）を 発刊する事が出来ました。そして55周年には、水球出場者の他に、頭山立國ガネフォ団長や本部役員の山田脩様、玄洋社の浦辺登様、テレビマンユニオンの田中由美様、そして、ガネフォ会の皆様も寄稿して下さい「ガネフォ1963への想い」（78頁）を 発刊することが出来ました。

また、2018年12月には富田幸祐様が、「新興国競技大会（GANEF0）における日本選手団参加問題と日本政府：外務省外交史料館所蔵史料をてがかりとして」を 発刊、そして、2019年9月に浦辺登様が「幻のオリンピック・ガネフォ」と題する小冊子を 発刊、また2021年9月に浦辺登様が、「ガネフォに参加した水球チームの歴史

的意義」と言う題名で、ガネフォに関する書籍を発刊して下さいました。

また、2018年（平成30年）3月には、冨田幸祐様がガネフォを含むスポーツ関係の論文を一橋大学に提出する事により、一橋大学長から「博士号の学位」を授与されました。こうしてガネフォが皆様のお役に立てている事に喜びを感じています。

今回の60周年を記念してガネフォ関係者の集まる最終の「ガネフォ会」が11月3日に東京・銀座で開催出来た事や、また皆様のご協力で「60周年の記念誌」を発刊できる事は、大変ありがたい事であり、関係者皆様のご努力とご協力に心から感謝申し上げます。

“本当に長年に渡り、いろいろと応援して下さい有り難う御座いました。”

“テレマカシー”（日本語訳：アリガトウゴザイマシタ）



天皇皇后両陛下のインドネシア訪問時のニュース映像（日テレNEWSより）